

鶴岡市郷土資料館所蔵

『庭中花の歌発句』翻刻と解題

— 酒井忠徳と近臣達の和歌・俳諧 —

稲葉 有祐

a 湖北短期大学非常勤講師

【キーワード】

近世文学 和歌 俳諧 酒井忠徳 庄内藩

本稿では鶴岡市郷土資料館国分文書に所蔵される、庄内藩酒井家六代当主、忠徳(たなかちか)(宝暦五年〜文化九年)とその近臣達による和歌・発句集を翻刻・紹介する。

忠徳は明和四年、父、忠温(たなかぬ)の死去に伴い家督を継いで庄内藩主となり、摂津守、左衛門尉、侍従等を歴任する。家督相続時には窮乏していた藩財政を豪商、本間光丘の登用を通じて再建、天明の飢饉を経、財政の悪化に向かった寛政期においても竹内八郎右衛門、白井矢太夫らを中心に農地改革を断行する等、仁政を施した名君として知られる。文化二年には藩校の致道館を創設し、学問の奨励にも尽力した。治世は三十九年にわたり、同文化二年九月二十五日に、嗣子忠器(たなかた)に家督を譲り退隠する。

また、忠徳は政治のみならず、刀剣鑑定をはじめ、書・画・和歌や俳諧等の文事においても優れた才能を発揮している。

和歌は、冷泉為泰・日野資枝の指導を受けた。和田行信著『存耳録』(明治三十五年刊)に次のようにある(引用に際して適宜濁点、句読点を付した)。

一、公(筆者注・忠徳)、歌学ハ始メ冷泉家へ御入門有シガ、

故有テ、後、日野家へ御質問被遊、後ニハ日野資枝卿ニモ

公ノ御懇情且御上達ニ感ジ、大事ヲ不残許シ玉ヘリ。

資枝からは天明二年二月十日、寛政三年三月七日に「内裏進上之一卷」(桜町天皇の勅命で資枝の父、光栄が二條家に伝わる歌道の奥義を書き記したものを)を伝授されており、右の「大事」とは、これらの相伝を指すと考えられる。忠徳の和歌に対する造詣は非常に深いものがあつた。

俳諧についても述べておくと、福井久藏(2)氏に「俳諧を秀国に学び、始め一秀、後凡兆と改める。その他、風琴、延麿、三千春、春歌亭、連樹観と号す」との解説がある。忠徳は他に米翁こと大和郡山藩柳沢家二代当主、信鴻(のぶか)、菊貫(きくつら)こと松代藩真田家六代当主、幸弘、銀鷲こと姫路藩酒井家二代当主、忠以(ただより)、清秋こと伊勢神戸藩本多家二代当主、忠永(ただなが)らの大名俳人達と交流があり、互いに点取俳諧に興じていた。庄内藩士、池田玄斎の嘉永五年に没するまでの凡そ五十年にわたる随筆集『弘采録』によると、忠徳は可因・得器といった江戸座の宗匠にも師事し、

誰かある障子をあけよ郭公

小扈従に刀もたせて梅見かな

といった句が人口に膾炙したという。

この忠徳を中心とした、家臣団、女中らとの和歌(狂歌を含む)・発句を集めたのが本稿で扱う資料である。本資料は文化七年春、庄内藩邸の庭中における花祝の集で、作者名に関する朱書が付される等、貴重な情報を含んでおり、忠徳周辺の文事を知る上で有益なも

のと考えられる⁽³⁾。

なお、現在、忠徳関連資料の多くは致道博物館に収蔵されており、和歌・俳諧に関するものは約三千点にも及ぶ。これらの資料は故酒井忠治氏による長年の整理と、一九九九年から二〇〇一年の上野洋三氏・鈴木淳氏らによる調査¹⁾、そして近年それら先学の成果を引き継いだ錦仁氏・平林香織氏を中心とする調査により、その全貌が明らかになりつつある。同博物館には本稿で紹介する資料の草稿と目される『花の歌発句』・『庭中花の歌発句』なる書物二種も存在しており、目下、錦・平林両氏らが調査中である。諸本三本の比較・検討や資料全体を見通しての位置付け等については後考を俟ちたい。

注

(1) 藤田寛海「忠徳公の詠歌について」(『酒井忠徳歌集』致道博物館、一九七五年)。また、藤田氏は、この他に高崎藩の歌人で幕府の和学所に仕えた宮部義正(三藻)の影響が大きかったことを指摘している。

(2) 福井久蔵『諸大名の学術と文芸の研究 下』(厚生閣、一九三七年)。なお、忠徳の初号は、米翁の『松鶴日記』天明七年正月二十八日の条に「一、里光消息。酒井忠徳朝臣よりの百韻一卷来る^{秀山}」とあり、秀山とするのが正確だろう。後、寛政元年十二月二十日の条に一秀から凡鳥へと改号したとの記事があり、翌二年正月十八日の条以下に「凡兆」号が確認される。

(3) 本資料に触れた先行研究として、真島望氏「俳諧師の江戸地誌 写本地誌『風流江戸雑話懐反古』の紹介を兼ねて」(『成城大学民俗学研究所紀要』第三十八集、二〇一四年三月)がある。

(4) 上野洋三、鈴木淳研究代表『庄内藩主酒井家を中心とした諸大名の和歌・俳諧及び文事に関する研究 研究成果報告書』(一九九九年

【書誌】

度、二〇〇一年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)

装幀	写本一冊。楮紙
表紙	縦三〇・〇糎×横二四・一糎。白地南天文様
題簽	なし
内題	なし
尾題	なし
字高	二五・三糎(一オ・三行目)
行数	半丁八行
丁付	なし
序文	なし
跋文	なし
奥書	なし
識語	「文化七庚午年弥生中旬 酒井忠枝書」
印記	「大泉持」(見返し)、「大泉珍藏」・「大泉蔵」(二オ)
備考	虫損あり。朱書あり。和歌・発句の頭にはそれぞれ花形の印が捺される。保存に用いられる茶封筒には請求番号の「411」、「国分文書」「歌集」酒井忠枝(忠徳公三男)(文政)一冊、「御庭の桜を見て詠める」藩主忠徳・忠器、近臣及び側女中の和歌と俳諧」との記載がある。また、封筒内に「忠徳公第三男水野壱岐守忠韶養子初忠枝幼名乙次良後伊織／寛政四年六月廿六日生／天保十三年一月十五日卒去／文政十一年水野壱岐守 俳名柳兆 忠実ト改名ス」とのメモ書きが同封されている。題簽、内題等がないため、本稿では便宜上、書名を致道博物館本によって『庭中花の歌発句』とする。

【凡例】

- 一、旧字及び異体字は適宜通行の字体に改めた。
- 一、特殊な合字は通行の仮名に改めた。
- 一、本文中、朱で記してあるものはへ〜で括り示した。
- 一、虫損で判読できない文字は□で示した。
- 一、各和歌・発句や一部前書の頭には花形の印が捺されているが、翻刻に際しては省略した。

- 一、底本は丁付を欠くが、実丁数によって漢数字で丁付を付した。丁移りは、その丁の表及び裏の末尾において、丁数とオ・ウとを括弧内に示すことよってあらわした。
- 一、和歌・発句には便宜上通し番号を付した。
- 一、底本において、作者名は和歌・発句それぞれの下に記されているが、和歌の作者名に関しては、便宜上、前書下の位置に記すこととした。

【翻刻】

- 1 是やこのはなの主となりてた、はるハ桜になる、朝夕
 忠徳
 〈庭桜〉
- 2 咲そめて庭たに今朝は薄霞ミにほふやはなのなる成らむ
 全
 〈砌花〉
- 3 さきそめて花ハひとへに八重桜(オ) いろ香ふりせぬ万代の春
 全
 〈華祝〉
- 4 いかなれハおなしさくらも年〜に咲ます花の庭の長閑さ
 さち女
 興一しほにそ〜
- 5 ミよし野や志賀の桜の名にハあれと(ウ) けふの盛にいか、ま
 道寧
 さりき
 〈黒谷市郎右エ門〉
- 6 得かたきハ時去かたし花の本
 得器
 〈御庭の花を拜見して〉
- 7 おのつから頭のたる、桜かな
 全
 〈御庭にてまミへ奉りて〉
- 8 春毎にかはらて咲るさくらはなわきてことしや色を添ふらん
 忠器
- 9 はることにきみかミきりのさくら花(オ) さかりひさしく猶や
 喜代女
 匂ハむ
- 10 さかりなる砌のさくら色も香もあかぬ心そはなにつきせぬ
 ゆい女
- 11 盛りなる花の色香にあくかれてはる日くらせる花の木の本
 すま女
- 〈各到来之順に記す〉

- 12 万世の君かかさしとさくはなのいろ香にしむる春やいく春
かく女
- 13 色に香に染るや花のかりころも(三) なれて幾世の春もかさねむ
花岡
- 14 さきにはふ花の色香を友と見てあるしも千代の春に栄えむ
うらせ
- 15 君こゝに千世もみきりのさくら花あかぬ色香の春やいくはる
はるた
- 16 〈ふし見の御茶屋にて花を見侍りて〉
庭さくら雪とミる迄咲しよりふしの根かけて霞む白妙(オ三) 光重
〈紀太小膳〉
- 17 雲と見る物ハ桜や日本晴
亀泉
〈関茂太夫〉
- 18 春いく世よむとも尽し花さかり真砂子桜のあかぬなかめハ
忠徳
わきてうるハしき花にそ
〈あまた花の中に名ある数々の其花にもまさこ桜といへるは
- 19 遠近の見る目霞てはるかせにほふ小寫か花のさかりは
全
〈これも名札有中に小嶋か崎といふハ花の秀たるなれハ〉(ウ三)
- 20 御庭の花に召れて発句奉れとの仰事蒙りて
かさねく厚き恵ミヤ八重桜
晨風
〈石原倉右エ門〉
- 21 移し植てミはやす庭の八重さくら(オ四) はなのあるしの万代のはる
安久
〈吉野遊右エ門〉
- 22 散もせず咲ものこらすやへさくらみきりハはなの色香はかりそ
全
- 23 池水にちりてうかへる庭さくらなミの花ともまたやみさらん
忠徳
〈庭の桜をよめる〉(ウ四)
- 24 三芳野も初瀬もひとめの桜哉
柳兆
〈乙次郎〉
- 25 たのしみも水き旭のさくら哉
賀兆
〈力之助〉
- 26 千とせふる君か御園の八重さくらなをのとかにもほふ夕はへ
秀雅
〈御花を見奉りて〉
〈祿津郷右エ門〉
- 27 とし毎に盛り久しき桜哉
全
- 28 とひきつゝ立よる花のこの本に(オ五) いつか色香の袖の面影
忠徳
〈花留客〉

- 29 〈御花を見奉りて各哥発句を捧〉
 天地の恵ミヤ花に小鳥まで
〈村井藤助〉 花菱 全
- 30 限りなき盛りや花の幾千代も
〈大嶋寅助〉 一寫 忠徳
- 31 重ねつゝ、蝶の羽袖や八重桜
〈桜井笹之助〉 太寿
- 32 御桜八重よろつ代と咲にけり
〈石川八十八〉 狸遊
- 33 小鳥までほゝうと誉る桜かな
〈三浦寿悦〉 亀遊
- 34 不尽の根も花の木の間に見ゆるより
〈鞍貫金太夫〉 政教 巳三郎
（ウ五） あをけハ高き庭さくらかも
- 35 こゝろなき雀も千代や花の山
〈中山与七〉 不雪
- 36 梢より富士をミきりの花さくらいく千代を経る雪となかめん
〈中村七郎右エ門〉 周
- 37 拝ミ見る花や常にも日の御恩
〈高橋弥□右エ門〉 富泉
- 38 久かたの光りや君の八重桜
〈大嶋彦右エ門〉 小々
- 39 八重桜あくまで恵ミみちく〜てちとせもちらぬ春そゆたけき
（オ六）
〈中村伊右エ門〉 能明
- 40 言の葉をかさねてにほふ八重桜ミゆきか花か春にとは、や
〈朝花〉 全
- 41 さす影も色にいさよふはるの山ミねの朝日も華のおくなる
（夕花） 全
- 42 しつけしな色を霞の立こめてはなに入日の峯の暮かた
（ウ六）
〈父人の庭に数多の桜をうへ給ふて春ハ花の砌となし数く〜
 松も青く〜立ならふなかめ又やある〉
- 43 ともに千代をなかめむく〜松桜
（おなしき心をよミ奉りぬ）
〈留尻〉 吉之助
- 44 我もともに見奉りぬ松さくら
（弥生の中の八日空晴渡り花の木の間にふしのねをゆふへ
 に見やりて）
（オ七） 忠徳
- 45 花の色香たちそふ夕へ霞ゆくそらの中なる松のふしの根
〈御庭の桜を詠め奉りぬ古句にこれハく〜と計花のといへ
 るを思出て一句を奉捧ぬ〉
- 46 これハく〜と又いふ計庭桜
〈喜早文藏〉 喜文
- 47 ふし筑波ひとつハ花のミきり哉
（オ七）
〈富士筑波の山も遥にミえて砌の花も一面に霞有様ハたく
 ふへきにあらす〉
（オ六） 春花 凡兆

48 庭花をよむなり
此花のあるしとなりて千代ふりぬ 全
58 咲しより霞のぬきにおりはへてはるの錦や桜なるらし (紀太卯之吉) 惟義

49 人々にほめる桜の庭にハかにもある主しのはな鼻ハたかき梢か (オハ) 好成述
三千福桃之
59 千代万さかへて咲や八重桜 (吉田量平) 花粒
60 名所にも勝る御園の桜かな (三宅良助) 井蛙 (オハ)

50 咲や此御庭に千代の八重桜 (小黒三郎太) 芦中 (菅原数之助) 富春

51 思ハすもひさを七重や八重桜 (川内猪之吉) 青枝 (柴田佃) 香桂

52 有かたし山にも余るさくら哉 (岡田平作) 有泉 (土屋才蔵) 露卜

53 名も高しか、やく御庭八重桜 (根本安斎) 和声 (藤山儀助) 湖岩

54 幾千代もかさねて花の桜かな (池田祐平) 池流 (氏家弥兵衛) 秀東

55 各哥発句を奉り度とて差越す (矢口儀右エ門) 親安 (阿部又之進) 征鳥
うつし植しこと木にまさる庭桜君か千とせのかさしならまし (ウハ)

56 名所のはるもおよはし八重ひとへちとせの宿の花のさかりは (中村百度) 瑗 (水原老之助) 友之
68 諸人のこゝろ和らくさくらかな (加藤久蔵) 香亀 (ウハ)

57 諸人のこと葉の花の色香をもそへて砌の春のこのもと (服部行蔵) 信順 (志賀大助) 清典
69 かくてたゝめて度花を君ならてのとかにハ見ん幾千代の春

- 70 富士たかき恵ミを花に咲そへていろ香をあふく千代の庭もせ
(黒崎与八) 富吉
- 71 よし野山このものもの春ハあれと君かミきりにます花そなき
(松平舍人) 惟義
- 72 咲花のかけをうつせハ池水のうをもこすへにあそふのとけさ(オナ)
 万済
- 73 庭さくら雲と見る迄さきにけりよし野、山もよそならぬかも
(高橋金藏) 義済
- 74 君とともに万代を経んさくら花いく春ことに色香をそます
(山内善右エ門) 政長
- 75 咲そめてあかぬ匂ひにかすミさへたちさりあへぬ桜木のもと
(旅河権之助) 正直
- 76 見れハ猶ミぬ日も宿にあこかれてこゝろそらなる花のころかも(オナ)
(相良堅治) 重光
- 77 君か手にそたちし花の咲そめてけふこそ春の詠ならまし
(末松彦徳) 龍拳
- 78 名にしおふ八重九重のさくらはな千代の詠もたのしかるらん
(長沢多仲) 和□
- 79 たのしミのまた先長し遅桜
 柳賀
- 80 爰もまた柳桜のにしき哉
 宗務
- 81 時ならぬ雪と見まかふ桜かな
 栄賀
- 82 見るも恐書もおそれや花に筆
(祐賀(オナ)) 祐賀
- 83 ミな花のかほる御庭や香も清し
 長賀
- 84 八重ひとへいつれも花の匂ひ哉
 三哲
- 85 咲満てかせも通らぬ桜かな
 友鉄
- 86 雲と見て仰けハ高し桜はな
 閑斎
- 87 月雪もかねつ御園の花の今
(門叶矢稱) 雷□
- 88 仰見ん威あつて猛し八重桜
 善徹
- 89 名に高さよし野初瀬もおよはしなミその、桜何にくらへん(オナ)
(上野善悦) 元繁
- 90 なにたてる山も及ハし桜はな御園に匂ふ不尽のねおろし
 龔敬

91 咲ミつる梢ハ雲のそらめかトミきりにほふ花のいく本
園浦

92 幾春を重むはなの庭さくらミきりにふかき色香そふらん
藤女

93 色に香にたくひ嵐もしつまりてはなに長閑きはるやいく春(社三)
袖女

94 咲にほふ花にかさねんはるいく世いろ香のとけき君かミきりに
とま女

95 咲たりな山桜戸の明放し
春花 凡兆

96 色に香に言葉の花の咲添てミきりの桜いと、のとけし(社三)
右 忠徳

文化七庚午年弥生中旬

酒井忠枝書 (社三)

【付記】

※本稿をなすにあたり、鶴岡市郷土資料館には資料閲覧・翻刻許可をいただいた。また、平林香織氏、真島望氏より貴重なご教示をいただいた。記して深謝申し上げる。

※本稿は二〇一三年度科学研究費補助金(基盤研究(C))による研究「松代・一関・南部・秋田各藩の和歌活動・俳諧活動による大名文化圏形成解明の新研究」(課題番号: 25370223 研究代表者: 平林香織)の研究成果の一部である。